

親役割観の形成と変化に関する研究 - 育児期家族を中心に -

| | |
|--------|---|
| 著者 | 神谷 哲司 |
| 号 | 11 |
| 学位授与番号 | 67 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/37097 |

かみ や てつ じ
神 谷 哲 司

学 位 の 種 類 博士（教育学）

学 位 記 番 号 教博 第 67 号

学位授与年月日 平成 17 年 3 月 25 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
教育心理学専攻

学 位 論 文 題 目 親役割観の形成と変化に関する研究
－育児期家族を中心に－

論文審査委員 （主査）
教授 菊池武剋 教授 本郷一夫
教授 長谷川啓三

論 文 内 容 の 要 旨

【問題と目的】（第 1 章、第 2 章）

「親になること／親であること」についての発達心理学的な研究は、それまで「子どもの発達に影響を与える存在」でしかなかった母親や父親に焦点を当て、さらに「親の発達」に焦点を当てた。本論文は、育児期の家族において、「相互交渉を通じて、育児の分担に関する基本的なルールとパターンを形成していくこと」という夫婦の相互性に着目して育児期初期における親の発達をとらえようとした。日常的な育児に関するルールとパターンを築いていく中で、夫婦がそれぞれの程度親役割を担うものであるかという認識（親役割分担の認識）は夫婦の相互性を基盤に調整されるが、その相互調整は子どもが生まれて育児を担うようになってから行われる。従って、夫婦のみならず「子ども」を含めた家族システムの観点から検討されることが必要になる。そこで、子どもから発せられる行動としての「泣き声」を取り上げ、乳児の泣き声に対する認知処理過程について実験的手法によって検討した。さらに、少数事例を対象に個性記述的に検討することによって、得られた知見を統合することを試みた。

【結果と考察】

1. 現代日本における親役割観と家庭内性差観（第 3 章）

育児期夫婦を対象とする質問紙調査によって親役割観、性差観の項目を選定した。仕事・家庭役割を示す「伝統的労働分業観」と、家庭内の母親・父親役割を示す「子育ての性別観」の2因子が抽出された。

2. 青年期後期における親役割観・親役割ステレオタイプと個人の親役割観の関連と形成要因について（第4章）

青年期後期男女の親役割観について、社会的認知と個人的認知という2つの水準でその様相を明らかにし、さらに両者の関連と、それら親役割観に関連する要因について検討した。親役割観について、男子青年は、個人の親役割観を性差観や社会的なステレオタイプとの関係の中に位置づける一方、女子青年では社会的ステレオタイプと関連は見られず、父母の夫婦関係や父母の性差観が女子青年の性差観を媒介して親役割観を形成していることが示された。

3. 育児期夫婦における親役割観（第5章）

育児期夫婦の親役割観の様相を明らかにし、さらに親役割観への影響認識や夫婦がともに子育てをしているという認識（共育て意識）、性差観との関連について検討した。育児期における個人の親役割観は男女とも、平等群、労働分担群、父母分担群に大別された。女性の労働分担群は、子育ての性別観が父母分担群と同様に高く、その形成・変化には特に、実親や教員といった人たちとのかかわりにおいて影響を受けていることが示唆された。平等的な親役割観を有する方が共育て意識が高いことが示された。

4. 育児期家族への以降にともなう夫婦の親役割観の変化（第6章）

単身期、新婚期、育児期の親役割観の変化について横断的に検討した。1) 乳児期の養育という役割は、男女とも育児期においては母親に比重を高く認識していた。2) 育児期を通じて、乳児養育役割観の夫婦間の差異は徐々に大きくなっていく。3) 夫婦間の親役割観の影響認識は、必ずしも夫婦に閉じたものではなく、マスコミや友人といった家族の外部からも影響を受けることが示された。

5. 育児期夫婦における親役割観の異同に関する研究（第7章）

親役割観の異同タイプごとに、親役割観への影響認識や共育て意識との関連について検討した。パートナーからの影響によって親役割観が類似するという予想は確かめられなかったが、1) 共育て意識は個人の有する親役割観が平等的であるほうが高いこと、2) 親役割観が類似している群においては、共育て意識が夫婦で同程度の認識がされていること、3) 夫婦どちらか、または双方が伝統的分業的な親役割観を有している場合に、パートナーからの影響認識が共育て意識に関連していることが示された。親役割観の変化は夫婦間のみではなく、親や親族、友人といったより広い関係性の中で起こっていることが示された。

6. 乳児の泣き声に対する父親の認知（第8章）

泣き声の知覚と認知的枠組みについて、父親のみならず、子どもを持たない男性をも対象に検討した。1) 学生に比して父親の方がネガティブなものと知覚せず、新婚群、初妊婦群の評価値も父親群に類似した傾向を示した。2) 泣き声の知覚に関連する要因については、性役割観と養育経験が関連することが示唆された。3) 泣きの生起原因の類推については、父親群のみならず初妊婦群においても泣き声の火急性に対応する類推が行われており、泣き声の持つ火急性に対する認知的枠組みが形成されていることが伺えた。

7. 乳児の泣き声に対する父母の認知と児童意識（第9章）

育児期夫婦の泣き声の情動的知覚とその認知過程、および育児生活意識との関連について検討した。1) 乳児の泣き声に対する情動的知覚について、高低2種のリスク乳児の泣き声の弁別で男女差が見られ、女性は泣き声のネガティブな側面に、男性は音響的な側面に着目すると考えられた。2) 男性よりも女性の方が、泣き声の認知処理が实际的であり、養育役割を担っていることが反映されていた。3) 泣き声の知覚と親となったことによる変化の認識や育児意識との関連については、(1) 男性の自己評価と親となったことによる変化との関連が顕著であった。(2) 高リスク乳児の泣き声をネガティブに知覚する女性は育児ストレスが高かったことが示された。

8. 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化に関する個性記述的検討（第10章）

追跡的な数量データと半構造化面接による質的データの両側面から育児期移行における親役割の夫婦間相互調整について検討した。その結果、親役割観の相互調整は夫婦どちらか一方の役割観へと他方が修正・変化する傾向、そこに子どもの気質的な差異が関連すること、さらにいずれの家族においても、「子育て期の壁」が存在し、そこを乗り越えることが夫婦の親役割観の調整において大きな山場となること、さらに、その山場を越えた後には、親役割観の異同は大きな問題ではなくなり、「親になる」ことによる人格発達としての「柔軟さ」が形成されると推察された。

9. 総合的考察と推論（第11章、第12章）

育児期家族への移行にともなう親役割観の変化については、ただ単にパートナーからの影響によって夫婦の親役割観は類似するようになるのではなく、子育て意識や夫婦以外の人からの影響によって親役割観を変化させること。乳児の泣き声の認知の研究から、子どもの気質的な側面が、泣き声への対処行動のみならず、泣き声を知覚した親やパートナーの育児意識とも関連すること、さらに、親役割の相互調整には一種の臨界的な時期があり、そこを超えると親役割観の異同は夫婦にとって大きな問題ではなくなることで、またその過程で「柔軟さ」が生じてくると考えられた。これらを踏まえ、青年期後期から育児期家族への移行にともなう親役割観の形成と変化について、育児期夫婦における親役割観の相互調整過程のフィードバック・ループ・モデルが構築された。その過程を経て、夫婦に「子育て意識」と「柔軟さ」の認識が形成される。「親になること」とは、夫婦がふたりで子育てをしているという認識が持てるようになること、すなわち「伴侶性」を有

することであると考えられた。

論文審査の結果の要旨

生涯を視野に入れて発達を研究する生涯発達心理学においては、成人期や老年期の研究が精力的に行われている。「親の発達」も成人期発達一側面である。「親となる」あるいは親としての成長・発達ということは、個人的に実感できることではあっても、何がどうなることなのかを客観的に示すことは難しい。現在、親の発達についての研究が盛んに行われるようになってきているが、その蓄積は多いとはいえない。

本研究は、これまでの親研究の批判的検討をふまえて、夫婦の相互性に注目し、夫婦間での親役割観の調整過程をとらえようとした。子どもの育児をめぐって親である夫婦間で親の果たすべき役割の認識にズレや葛藤が生じ、それを相互に調整しあう過程のなかに「親の発達」をとらえようとするのが本研究の眼目である。母親の変化と父親の変化をそれぞれ別々に見るのではなく、父親・母親・子という家族を取り上げて、そこに起こる変化を見ることで「親の発達」をとらえようとしたのである。研究を通して、親役割観の変化と調整は、しかし、単に相互の影響からのみ生じるのではなく、それぞれの親や周囲の重要他者からの影響によって生じること、子どもの気質的側面が関連すること、さらに役割の相互調整を越えて「柔軟さ」が生じること等が明らかにされ、親役割観の相互調整過程のフィードバック・ループ・モデルが構築された。この過程を通して夫婦が二人で子育てをしているという認識がもてること、すなわち「伴侶性」が形成され、これが育児期における「親の発達」であると説明された。

従来の研究によく見られた「親の発達」を母親父親それぞれにとらえるのではなく、家族の変化過程としてとらえ、緻密な調査と実験でそれを明らかにし、モデルを構築できたことは、これまでの親発達の研究の問題点の一部を克服し、理論的な展開の可能性を高めたものとして評価できる。しかし、親の発達に関する要因が十分に取り込まれているとはいえない。その意味では、構築されたモデルは未完成のものである。より広い要因空間を想定して、要因関連を検討することが必要であるが、筆者もそれを認識しており、今後の発展が可能である。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。